

保育職への接続・適応に関する 先行研究の系譜と課題 (1) —保育職志望段階に着目して—

増 田 翼

(2020年3月2日受理)

Comprehensive Review of Research on Connection and Adaptation to ECEC Teacher (1)

Tsubasa MASUDA

要旨：本稿は、保育職への接続・適応に関する先行研究のうち、特に保育職を志望する段階（主として高校生）に焦点を当てる文献について、その系譜ごとに整理するとともに、何が課題として浮かび上がっているのかを検討したものである。具体的には、志望動機・進学動機に関するもの、保育職のイメージ・職務内容理解に関するもの、職場体験に関するもの、高大接続に関するもの、といった系譜ごとに先行研究の成果を取り上げまとめていった。こうした作業をもとに、専門職養成・育成における「量」と「質」の問題を考えるためにも、保育職志望段階の現状と課題について現場保育者含めた保育界全体の関係者が共有すべきだと提言した。

Key words：量と質 志望動機 進学動機 保育職のイメージ 職務内容理解 職場体験 高大接続

I. はじめに

保育者を養成・育成する環境は、ここ数年で大きな変化を余儀なくされている。保育者養成校としては、2019年度以降の入学生に向けて、文部科学省の新教職課程および厚生労働省の新保育士養成課程に対応するカリキュラムへの改編が迫られた¹⁾。また保育現場においても、従来以上に「多様な課題への対応」や「若手の指導」など「職務内容に応じた専門性の向上」を図るための「研修機会の充実」が「特に重要な課題」となっていることを受けて、2017年4月から「保育士等キャリアアップ研修（厚生労働省）」が実施されており、保育所および認定こども園等勤務の保育者を中心に受講が進んでいる²⁾。もとより、2009年から導入された「教員免許更新制」についても、当初は幼稚園教諭のみの対象であったが、2013年からは認定こども園法との関係から、幼稚園教諭免許状を保有している認可保育所の保育士が更新講習を受講できるようになり、一気に

現場保育者の受講者数が増加した。さらに10グループ存在した免許更新の受講区分も2020年2月をもって1巡目を終え、これから先は2巡目を迎えることになる。このように、この10年ほどを振り返るだけでも、保育者養成・育成環境は激変したといえるだろう。特に、養成・育成に関する要求・要請が同時期に多方面から出されていることは偶然とはいえない。その背景には、保育に限らず、専門職養成分野全般にわたる下記の実情が横たわっているといえるだろう（橋本鉦市：2012）。

養成プログラムの長期化、カリキュラムの標準化、レリバンスの強化、強力な計画化という昨今の趨勢の背景には、専門職が現場での専門的業務に携わる際に必要な「専門職コンピテンシー」について、それを保証する養成プログラムを求める現場や顧客からの要求・要請の高まりがあり、またそうしたニーズの的確な把握

とそれに従った計画的な供給の必要性などが高まってきていることがある。それに伴って、公費支出を求められる国家・政府、高等教育機関、専門職団体など専門職養成を取り巻くさまざまなアクター(ステークホルダー)が、専門職養成への関与・介入の度合いを強めてきている。

当然、我々は、保育者という「専門職」も従来とは明らかに異なる位相のもとで論じられるようになったことを自覚せねばならない。必要な「専門職コンピテンシー」を明瞭にすると同時にそれを期間内に養成できること、発展的に育成できることの保証を明示していかなければならない。この点の改善なくしては、「保育」の地位向上は期待できないであろう。

ところで、こうした「関与・介入」において、常に議論となるのが「量」と「質」の問題である。再び、橋本の言葉を引用しておこう。

常に問われてきた(いる)のは、「量(数)」と「質」であり、そしてそのバランスである。すなわち、専門的市場のニーズを過不足なく充足させるにはどれだけの量(数)を供給するか、またその専門的業務を遂行するためには教育プログラムの質をいかに維持・保証するか、といった問題である。……専門職の量と質という両者はある意味トレードオフの関係にあるが、しかし予定調和的にそれぞれのバランスがとられるわけではない。したがって、……その絶妙な安定的なバランス(「適正」な供給量と品質)をどう設定するのか、そしていかなるアクターがどのような戦略・ロジックによってイニシアティブをとるのが重要になるのである³⁾。

保育者養成・育成における「量」と「質」を考えた場合、この二つのバランスは、志望・選抜・養成・採用・研修といった各段階で調整されることになる。当然、この各段階に関与しているのは保育者養成校であり、保育職への接続・適応を意図する無数の活動を展開するなかで、「量」と「質」の安定

的なバランスを維持すべく努力を続けなければならない。

ところで、上述の「量」を語るうえで見落としてはならないデータが最近発表されている。ソニー生命保険株式会社が全国の中高生1000名にアンケートした調査結果をまとめ2019年8月にリリースした「中高生が思い描く将来についての意識調査2019」によれば、2017年調査において女子中学生の「6位」に位置していた「保育士・幼稚園教諭」(9.0%)が、2019年調査においては「10位圏外」へと落ち込んだというのである⁴⁾。他会社が発表している職業ランキングでは大きな変化のないものも存在するので⁵⁾、今般のソニー生命の調査結果が偶然にも振るわなかった可能性もあるが、これまで不動の地位をキープしてきた保育職志望が圏外になってしまったことを軽んじるべきではないだろう。なぜならば、中学生にとって保育職の魅力が減退している＝将来的な「量」の確保の困難性を想起させるからである。そもそもだが、上で述べたように「専門職」としての要求は高度化し、それに伴うシステムや内容の変更がされているにもかかわらず、保育の職場環境や地位は一向に変化していない印象がある。このまま10年後20年後と人口減少が加速するなかで、「量」と「質」のバランスの取れた保育者養成・育成システムは維持できるのだろうか。

こうした課題意識のもと本稿では、保育職への接続・適応に関する先行研究のうち、特に保育職を志望する段階(主として高校生)に焦点を当てる文献について、その系譜ごとに整理するとともに、何が課題として浮かび上がっているのかを検討していきたい。なお本文の流れとしては、2000年以降に公表されている先行研究を中心に、「保育職志望者の現状に関する」ものと、「保育職志望者獲得に向けた企画・戦略に関する」ものとを分けて、それぞれの系譜と課題をまとめていく⁶⁾。

Ⅱ. 保育職志望者の現状に関する先行研究

1. 志望動機・進学動機(進路選択理由)

保育職志望者の状況や動向の調査研究のなかで

も、多くの成果が出されているのが保育者養成校進学前段階（高校時）での志望動機・進学動機に関するものである。この点について複数の論文を公表している長谷部比呂美は、なぜ在学する学科への進学を選択したのかという点について短大・専門学校女子学生712名から回答を得て分析した結果、進学志望動機として「肩書・経済価値（地位への志向、卒業後の経済価値）」「教養（視野を広げ教養を高める）」「無目的・享楽（自由に楽しむ、モラトリウム機能を志向）」「資質能力伸長（自分の才能、得意とすることを追求）」の四つの志向を見出している（長谷部：2008）。長谷部のこの研究は、保育者を目指す学生はもちろん、それ以外の職種（社会福祉・介護・栄養）を目指す学生も含め調査することで、保育者を目指す学生は「肩書・経済価値」「教養」「無目的・享楽」の各志向が他職種志望者よりも有意に低い点を明らかにしている。つまりは、保育者を目指す学生は、積極的動機を有し進学目的が明確である割合が高いということらしい。ただし、「目的意識の希薄な進学態度」も「全体（保育専攻群）の1割強認められた」との記述も見られ、保育職志望者のなかには一様ではない動機が並存している点も強調している⁷⁾。

加藤麻里恵（2009）は、保育者養成を担う4年制大学の学生97名を対象に、大学への進学動機と「保育者効力感⁸⁾」の関連を調べている。これによれば、進学動機として「専門性（分野追求）」「社会的達成（収入・地位）」「自由（エンジョイ）」「無意志（漠然と・他にやりたいことがない）」という4因子が抽出され、このうち「専門性」「社会的達成」を求める学生ほど「保育者効力感」が高いという結果が出ている。加藤はこの点について、「やる気や目的を持って大学に入学してきた学生ほど大学の授業にも課外活動にも意欲的に取り組み、その意欲や自信が保育者効力感を高めることにつながったのかもしれない」と考察している⁹⁾。ほかにも池田幸代（2016）は、保育系短大学生164名を対象とした調査により、進学理由として「受動・延引」「知的欲求・就職」「専門職・資格免許」「学生生活享受」の4因子を抽出している。そのうえで、「知的欲求・就職」

「専門職・資格免許」といった進学理由はその後の積極的な学びにつながっている一方で、「受動・延引」「学生生活享受」という「受動的かつ勉学への意欲の低い進学理由」はその後の学びだけでなく「保育職志望度（保育職に就きたい気持ちの強さ）」にも関与しないという結果を導き出している¹⁰⁾。

おおよそこうした先行研究を概観すると、養成校には多様な志望動機を有した学生が混在しており、必ずしも保育職への志望意欲が高い学生ばかりではないこと、さらにはそうした動機の違いが養成校での学習意欲や「保育者効力感」等にも影響を与えてくる可能性があることが示唆されている。なお、多様な志望動機を質的に研究している文献も存在し、たとえば岩田昌子の「進路選択行動」に関する研究（2010）では、「入学時は保育者になるという自覚は全然なく、子どもが好きでかわいいからなりたいたいという程度の思いであった」、「県内の学校なら進学して良いと親から言われて……子どもに関することが一番興味を持てたので決めたが消去法¹¹⁾」といった数名の学生たちの想いが紹介されている。また、高校生の進路意識について考究する長谷川誠の研究（2016）では、以下のような生徒の声が掲載されている。「とにかく就職するためにも資格を取りたいと思ったから……どの資格にするか迷いましたが、子供が好きなので保育士に決めました¹²⁾」、「簿記の資格を取ったので、高卒で就職できそうならしておきたいと考えています。もし、就職できなかった場合は、専門学校に進学して保育士の資格を取りたいと思っています。資格を取るのが目的なので、高い学費を出してまで大学には進学しません¹³⁾」。

ところで、神谷哲司（2010）は、こうした進学動機が「保育者の仕事ぶりを見て」「小さい頃からあこがれて」など自らの体験や想いに端を発するもの（自成的動機）なのか、あるいは「親に勧められて」「家族や近親者に勧められて」といった他者から与えられたもの（他成的動機）であるかを分けて、その違いと進学理由や養成校在学中の「保育者効力感」とがどのように関連するかを明らかにしている（保育者養成系女子短大生214名対象）。神谷によれば、「自成的進学動機」が形成された学生は「資格

取得や一生役立つ知識や技術を求め」る積極的な進学理由にもとづき保育者養成校に進学し、「最初の実習の前後までは比較的高い保育者効力感を有している」が、「他成的進学動機」しかもたない学生は「他に進む道が見つけられなくて」「なんとなく自分に向いていると思ったから」といった理由で進学し、「最初の保育所実習を体験した後に保育者効力感がそれほど上昇するわけでもなく、さらに、その後も保育者効力感是在学中に低下していくことが示され」たという¹⁴⁾。このように、志望動機の発端が自成的＝自発的であるか他成的＝受動的であるかによって「保育者効力感」に違いが生じる可能性があることを指摘する神谷の論稿はたいへん興味深いといえよう。

ちなみに、大村壮（2011）は、「保育者を目指し始める時期と志望動機の類型の関係」について調べており（保育系短大生238名対象）、「小学生までに保育者を目指し始めた者」ほど「保育をがんばり就職も考えて進学した」傾向が見られ、これに対して「中学生以降に保育者を目指し始めた者」ほど「経済価値を求めて進学した」傾向があるのだという。すなわち「小学生までに保育者を目指し始めた者」は「大人から機会を与えられる前にある程度、自律的に保育者を将来の職業として考えていた」＝「保育者になることが目的になって」いるが、「中学生以降に保育者を目指し始めた者」は「保育者に憧れたりするよりも、資格や免許を取得し、経済的により豊かになることを優先的に考えている」傾向が強いということが示唆されているのである¹⁵⁾。このように志望動機が形成されはじめる時期に着目する研究もいくつか散見されるが、こうした結果は、後に述べる「職場体験」等の時期の在り方を考えるうえでも参考になるだろう¹⁶⁾。

さて、ここまで保育者養成校進学前段階（高校時）での志望動機・進学動機に関する先行研究を見てきたわけだが、総じてみると、早期に（小学生のころに）保育職を志望し、なおかつその動機が自発的で目的意識の高いものであるとすると、その後の養成校での学習意欲も高くなり、さらに「保育者効力感」も高くなる、といった一連の仮説が想定でき

るだろう。さらに、これらと就職してからの状況等との関連なども分析を重ねていけば、保育職を志望し、実際に仕事に就き、さらに継続的に成長していく保育者当人のキャリアプロセスが描けるかもしれない。

ただし他方で、今まで挙げてきた研究の多くが心理学的手法による成果に限られている点には注意も必要である。「動機」「選択理由」は、学力、経済状況、地域性等との関連、といった社会学的視野にもとづく考察を抜きには語れないはずで、さらに保育者養成の場合、四大と短大との棲み分けが志望者の「動機」「選択理由」に影響を与えている可能性も否定できない¹⁷⁾。そういう意味では、本項で見えてきた保育職志望者の志望動機・進学動機の傾向が、全国の養成校一律に首肯し得るものなのかどうか調べる必要があるかもしれない。また、こうした話はすぐに、意欲の低い学生と高い学生とを見分けるといった話に発展しがちだが、むしろ様々な人がいるのは当然であって、専門職養成・育成を見据えたうえでまずは「量」の確保が重要と捉えるならば、多様な「動機」「選択理由」を有していても、養成校のカリキュラムやその他の支援によって一人でも多くの志望者の「保育者効力感」を高め、さらには保育者として継続して働いていけるようなシステムを構築していくことこそ重要なのだといえよう。

2. 保育職のイメージ・職務内容理解

ここでは保育職志望段階でどれほど保育職のイメージを抱けているか、職務内容を理解できているか、という点についての先行研究を集めてみたい。たとえば、三つの高校で高校2学年の生徒計258名（保育職志望に限らず）を対象に「保育士のイメージ」を調査した広瀬由紀（2013）によれば、高校生たちは「保育者」という「人」に対しては「イメージを抱きやすい上、そこに肯定的な評価をもっている」が、「保育職」という「職業」に対しては「認識が薄いもしくはどちらかといえばマイナスの印象を抱いている」ことが示唆されたという。さらに広瀬は、高校2学年の時点で進路未決定の生徒の場合、「すでに進路を定めている生徒に比べ、経験

や情報の不足などから、保育職に対するイメージがより具体性に欠けることが推測される」とも強調している¹⁸⁾。ほかにも中田奈月(2011)は、養成校入学時に「保育士や幼稚園教員は専門職ではない」と認識している者が「5人に1人は存在」し、なぜそのように認識しているのかを尋ねると「子供と一緒に遊んでお金がもらえる」「子供が好きなら誰でもできる仕事」「大人相手は難しそうだけど、ちっちゃい子相手なら自分でもできそうだと思っていた¹⁹⁾」などと回答したと述べている。

どちらの文献でも職業イメージ、職務内容理解の希薄さが話題となっているが、そもそもなぜ保育の職務内容は正しく伝わっていないのであろうか。この点の詳細を明らかにすべく取り組んでいる永盛善博(2013)は、以下のように警鐘を鳴らしている。少し長いが引用しておこう。

学生は「子どもが好き」なことを理由に、「保育職は子どもと関わる仕事」と考えて入学してきた。その一方で、養成校からは「子どもが好きだけでは、保育者は務まらない」と伝えられる。学生としては、たとえ子どもが好きという気持ちそのものを否定されたわけではなくとも、自分の進路選択の拠りどころを失った気持ちとなるだろう。さらに、実際に学ぶ内容は抽象度の高い専門科目が多く、保護者支援や種々の書類作成、行事や日々の保育の準備など、子どもと直接関わる以外の仕事があることや、それらの仕事を遂行するための知識・技術を習得する必要性も実感することになる。……このような学びの中で、学生が「自分が思い描いていた保育者と、実際の保育者は違う」「自分がしたかったのは、こんなことじゃない」と感じることは、当然であろう。

たしかに、保育者の職務内容を理解せぬままに、ある意味、誤解した状態で養成校での学習をスタートすれば、そこで生じるギャップは相当なものになるかもしれない。実際、永盛は、オープンキャンパスで保育系学科の企画に参加した高校生21名への調

査から、「高校生は子どもが好きで保育職を目指し」「子どもの成長援助や保護者との連携といった役割」や「子どもの成長への立ち会いという魅力・やりがい」を「理解していた」が、「保育者が長期的計画や短期的計画を立てて保育を行う点」「保育の計画書や実際の保育の記録など、書く仕事が多い点」について理解が不足していた、とまとめている²⁰⁾。

さらに永盛(2018)は、上記の研究を発展させるかたちで、オープンキャンパス参加の高校生141名に「書き物業務」に関する調査を実施し、「約3分の2は、その把握内容自体は不十分ながらも、書き物業務があることを把握してい」るが、「実際にどのような書き物があるか」と尋ねると、多くは「連絡帳」を挙げ、「保育計画の作成」と回答した者は「141名中6件」しかなかったと記している²¹⁾。

ところで、このように職務内容理解が希薄な現状については、おそらく全国的に見られる問題ではないかと思われる。インターネット上には各種の職業内容を紹介するサイトが無数に存在するが、保育職の職務内容が以下のようなニュアンスで記されることも少なくない。

保育園など、所属している組織のカリキュラムに従って、子どもたちと一緒に遊んだり、身の回りのお世話をしたりするのが仕事内容です。単に子どもの相手をするだけではなく、遊びや日常生活を通じてご飯の食べ方やトイレの仕方など、生活に必要なことを教育しなくてはなりません。また、預かっている子どもの保護者に、子どものしつけ方を教えたり、相談に乗ったりもします²²⁾。

保育士の仕事は、単純に子どもを預かって身の回りのお世話をするだけではありません。保育士の役割とは、子どもたちの生活全般のお世話をしながら、心身の発達を促し、社会性を養うこと。そして、食事や睡眠、排せつ、清潔さ、衣類の着脱などの基本的な生活習慣を身につけさせることです。子どもの成長にとって重要な役割を担っているといえるでしょう²³⁾。

これらの文章には主として「関わり」のことが書かれており、ここから書き物の多さをイメージできる高校生はいないだろう。そもそも世間の人々には、「保育者がどれほどの配慮と苦労をしながら子どもの育ちを捉え支援しているか、という肝心な部分が伝わらず、「単に、子どもを預かってくれる人、子どものお世話をしてくれる人、といったイメージに留まっている²⁴⁾」部分があるといわざるを得ない。こうした状況を改善するためにはどうしたらよいのであろうか。この点について永盛は、次のような文章を書くことで、この点の改善の難しさを示してくれている。

保育者の業務は高校生が思っている以上に大変なものである。そのため、保育者就職に対してそこまで強い決意を持っていない状態で、「このような業務もある」と安易に伝えることは、そもそも保育者となることを諦めてしまう可能性がある²⁵⁾。

これこそまさに、冒頭で触れた「量」と「質」のバランスがせめぎ合っている最前線を表すものであろう。すなわち、保育職志望段階から職務内容を詳細に伝えることは、一方では養成校において抱える葛藤を少しでも和らげ、学習内容の意味や意義を理解することの助けになるだろうが、他方では、その業務の複雑さ、煩雑さが鮮明となって保育職志望を諦める要因となるかもしれないのである。どうやらイメージというのは、詳細であれば良いとも限らず、かといって「子供が好きなら誰でもできる仕事」といった曖昧で誤解を孕むものを認めるわけにもいかず、どれほどのレベルで具現化するかという相当な戦略が求められるものだといえよう²⁶⁾。

さてここで、本項で取り上げてきた保育職のイメージや職務内容理解に関する研究の今後の課題として、以下の点を挙げておこう。つまり、主として高校生に対して、職務内容の何を具体的に見せていくことが志望者獲得に効果的なのか、あるいは保育職を志望したくなるようなイメージ戦略とはどのようなものなのか、などを明らかにすることが今後の

課題と考えられるだろう。

Ⅲ. 保育職志望者獲得に向けた企画・戦略に関する先行研究

1. 職場体験

現在、中学校、高校生活の一時期に「職場体験」「インターンシップ」といった名称で、希望者が保育現場を訪ねる企画が一般化している。様々な背景のもとに実施されているものの、一般的には「キャリア教育」の一環として行われていることが多い。このほか、中高「家庭科」の授業内容として「保育」を学びながら保育現場に携わる、通称「乳幼児とのふれあい体験」も実施されている。この「乳幼児とのふれあい体験」は子どもへの関心を高め、子どもとの関わりを楽しんだり、そこから「育てられてきた自分」について考えを深め「育てる自分」＝「親の役割」を理解したり、と様々な目的のもとに実施されるものである²⁷⁾。ここでは、こうした「職場体験」「インターンシップ」「乳幼児とのふれあい体験」等を研究テーマに掲げる先行文献のなかでも、参加する中高生を将来の保育職志望者という視点で捉え研究するものについて見ていきたい。

少し古いものにはなるが、高見令英ら（1999）ならびに山本哲也ら（1999）は、「進路を決定する前に実際の現場を見ることによって、明確な意志を持って進路を選択できるようにと企図され」ている職場体験の一例として、名古屋市の幼稚園で実施された体験実習を取り上げている。ここでは、「体験実習を行った4名の高校生の意識」「高校生に対する保育者（9名）の意識」「高校生に対する幼児（57名）の意識」を調査しているが、特に高校生の意識の結果からは、「保育者になりたいという希望を強く持つようになった」「保育の仕事のよい面だけではなく、困難な面を知ることができた」など一定の効果があったことが窺い知れる。これに対して、本項で重要視したいのは保育者側の意識である。記録されている自由記述を拾ってみると、「子どもと一緒に楽しく過ごしてもらえばそれで十分です」「とても楽しく過ごし、進路を決める参考になった様子であったので、よかったと思う」といった内容が並

んでおり、実際にこのとき対応した幼稚園教諭も、高校生に対して「『保育者』となって子どもを援助したり、働きかけをしてほしいといった指示は出さなかった」という²⁸⁾。もちろん、職場体験の趣旨との関係もあるので一概に評することはできないが、高見・山本らの研究で示されているような、高校生が楽しければ良い、進路選択の参考になれば良い、といった意識での受け入れは、ごく一般的なもののように思われる。換言すれば、職場体験を受け入れる保育者側は〈場の提供〉〈機会の提供〉に徹しており、前項で見たような職務内容理解のために、といった意識は薄いのが実情ではないだろうか。この点については、たとえば山本陸(2016)でも指摘されている。山本はいう。「職場体験を受け入れる保育者は、『子どもとして参加する保育現場』と『大人が仕事として参加する保育現場』の違いを意識して、体験者である生徒に保育の仕事伝える」ことが重要であり、「『保育される側』ではなく『保育する側』への視点の移行という目標で連携することが、保育職へのキャリア選択に有効な職場体験にするための教育的配慮となるだろう」と。極端な話、この職場体験は保育を知ってもらうための〈広報活動の一環〉であり、同時に〈後継の育成の開始〉と捉えることもあながち間違いではないはずだが、当然こうした意識が保育現場のなかで醸成されているとはいいい難い。

ところで、そもそも山本の研究は、「保育職を目指すのに職場体験は有効か」「職業選択に職場体験の質がどのように影響するのか」についての検討が目的であり、四年制大学保育学部入学者(調査時2年生)175名の回答をもとに、「職場体験と保育職への適性の自己評価」「保育職への就職観」を調査している。結果として、「(体験学習時にすべての領域の活動を経験させるためには日数が必要であるが)経験することがその後の就職に関する志望度には影響しないことが示された」という。すなわち「日数をかけて多様な活動を中学生に体験させても、それが養成段階での『保育職の就職』に対する積極性や楽観性とは関係がなかった」というのである。それではなぜ、日数を重ねても保育職を志望する気持ち

に影響がないのであろうか。この点について、山本は次のように解釈している。「『何をする仕事なのかが想像しやすい』職業であること……幼児期の経験に基づく『想像しやすさ』がかえって、本当の保育者の仕事を見えづらくしているのではないだろうか」と²⁹⁾。類似の点は、前項で触れた永盛も指摘している。永盛は、「書き物業務」があることになぜ高校生の意識が向かわないのかと考察する際、「保育者や保育者の仕事に対する理解はまだ不十分であるとともに、職場体験での学びによって書き物に対する意識が向かわなくなる可能性³⁰⁾」があることに言及している。ほかにも、職場体験が職務内容の詳細なイメージの伝達に寄与せず、むしろ「楽しい」だけの世界を強調してしまっているのではないか、という点については、最近出された宮城利佳子(2019)の研究のなかにも登場している。宮城は高校卒業後すぐに保育者養成校に進学しなかった者がどのような人生を辿って保育者への道を志すようになるのか、を追跡しているのだが、そこで紹介されている学生A(特別支援学校・小学校教員を志して浪人、その後に宅配便業者、居酒屋を経て保育専門学校に入学)が以下のようなコメントをしている。

保育士って遊びのイメージしか無かった。まあ、工夫して生活の仕方を教えているんだろうな、くらいにしか思ってた。……高校生の時に、保育も教育だってことをもう少し知ってたかった。職場体験とかだと、楽しむくらいしかできなくて、仕事の深い所がわからないと思う。まあ、楽しいというのも、きっかけになると思うが³¹⁾。

職場体験が却って本質を見えづらくする、という現象については、今後しっかりと調査分析を進めねばならないだろう。保育学という学問特有の問題なのか、職場体験の趣旨や実施上の問題なのか、はたまた参加する中高生側の問題なのか、慎重に検討すべき課題といえるだろう。

2. 高大接続

前項で見た「職場体験」とは異なり、大学・短期大学・専門学校といった高等教育機関側が「高大接続」も視野に入れながら高校側へアプローチする事例も存在する。たとえば、吉田眞理（2012）では、小田原女子短期大学主催の事業が紹介されている。これは、小田原高校定時制課程の時間割内に「保育者養成導入講座」を組み込み、短大教員が「保育の理論と実践」について「実技や演習」の授業を計10回（1回2時間）実施するというもので、事業2年目にはテキストを作成し、定時制課程を有する神奈川県内各高校に配布するといった活動にまで発展している。吉田によると、「保育者への適性は学力だけでははかれないため、進路選択のミスマッチが起きやすいことも課題のひとつである」ことから、「高大一貫した学習・進路支援を行い、保育に関心の高い生徒の学習意欲、就労意欲を高めることを目的」として、さらに「このキャリア教育を通じて就労意欲が高い保育士を養成することにより、県内の保育士不足解消」も意図した事業だという³²⁾。このほかにも、大学・短大が同じ学園内の高校と連携し、高校生のうちから保育の学習や現場実習（同学園内附属施設等で）を進めている事例について、酒井勇治ら（2013）、三沢大樹ら（2013）、二階堂邦子ら（2014）がまとめている³³⁾。また昨今では、文献としての記録は見当たらないものの、高等教育機関が主催する保育職志望者獲得（広報的戦略も含む）を目的とする様々な企画が実施されており、高松短期大学の「保育者をめざす高校生のための保育体験ツアー」や名古屋芸術大学の「1日限りのお仕事発見 幼稚園教諭・保育士体験」などもその一例として挙げられる³⁴⁾。

ところで、そもそも保育者養成校というのは、「普通科、総合学科、商業科、農業科など多様な校種から進学してくる」場所であり、「それぞれの高等学校の特色を理解・把握したうえで、どのような連携、接続が可能であるかを検討」する必要がある。こうした作業は一筋縄ではいかないものだが、「高等学校での学びをどのように活かし、大学の学びにつなげていくか」という「高大接続の視点」が

求められる現状にあつては、重要な課題の一つである³⁵⁾。また、この延長線上に「入学者選抜」や「入学前教育」「初年次教育」の話が出てくるわけだが、この点の詳細については、養成校のカリキュラムとも直結する問題なので、次の機会に譲りたい³⁶⁾。

さて、相当古いデータのため余談にはなるが、上原明子ら（1994）の研究に触れておきたい。上原らは近畿地区の高等学校804校を対象に、「進路指導担当者」の「保母・保育者像」を明らかにすべく調査を行っていた。これによれば、当時の高校教員にとって、保育者像（保育者を目指す生徒に求めるもの）は以下の通りに要約されるという。

保母は「大変な仕事」であるが「専門的技術が必要」な「子どもを育てるプロ」である。保育系への進路の決定にさいしては何よりも「生徒自身の志望」を重視し、「性格」「子どもが好きであること」「健康・体力」が必要な要因と考える。また「ピアノ・エレクトーン」「運動」「図画工作」などの技能を有していること、教科では「音楽」「体育」を重視するが、受験には「国語」が大切である³⁷⁾。

現在の高校教員を対象とした類似の研究成果が俟たれるところではあるが、こうしたイメージは、おおよそ今も変わらないように思う。先ほどから何度もイメージの話が出てきているが、高校教員に対して保育者に求められる力をどのように説明するかは、志望者本人の地平とはまた異なる一層難しい問題である。なぜなら、主要科目で構成される高校教育の何が保育の学びにつながり、どのように評価されるのか、という点を説明しなくてはならないからである。こうしたことの一応の妥協点が、「ピアノ・エレクトーン」「運動」「図画工作」や「国語」といった言葉に集約されていると思われるが、これらの説明で十分だとは当然いえない。こういった点でも、まだまだ専門職としての養成・育成環境が整っておらず、「量」と「質」のバランスを図っていくための地盤それ自体が非常に危ういものであることが了解できるだろう。

IV. おわりに

以上、本稿では保育職への接続・適応に焦点を当てた研究のうち、保育職志望段階の現状と課題を明らかにすべく先行文献を繙いた。各テーマやそれぞれの系譜のなかにおいては成果が蓄積されており、現状把握や課題の提案などもされてきているが、これらが専門職養成・育成における「量」や「質」の問題となかなか結びついていないことには注意を喚起しておきたい。特に、専門職養成・育成の「量」はまずもってその職種の志望者数（高校生の数）に左右されるという意味で、保育者のはじまりは志望段階から、という至極当然のことを確認しておきたい。この認識が保育者養成校教員になれば、その先の「質」の向上など実現するはずがないのである。それにもかかわらず、内田千春（2016）、無藤隆（2018）、清水益治（2019）のように、保育者養成教育の現状と課題を総括するような各論稿においてさえ、保育職志望段階（高校時）の話や養成校における学生募集の話題がほとんど取り上げられていないのは残念でならない³⁸⁾。今後、保育職志望段階に関する議論が「保育の専門性」を検討する地平において重要な位置を占めるものになるよう努力していく必要があるだろう。

さらにいえば、今回取り上げた先行研究成果の蓄積は、各養成校の入試業務・広報業務担当課の範疇に留まるものではないし、ましてや保育者養成課程に携わる教員が知っていればよいというものでもない。これらは、現場保育者含めた保育界全体の関係者が共有すべき内容である。なぜなら、保育現場が直接的に将来の人材募集、人材育成について考えなければ、これから迎える人口減少時代において保育者養成・育成環境の維持は期待できないからである。

さて最後に、本研究の今後の展望であるが、保育職への接続・適応に関する文献として、保育者養成課程在籍時に焦点を当てるもの、また保育者として働き始めてからの「新任」「中堅」「管理職」といった各時期に焦点を当てるもの、さらにそもそも「保育の専門性」とは何かについて焦点を当てるもの、などをまとめながら先行研究の系譜と課題を明らかにしていきたい。

【註】

- 1) 詳細は、増田翼「保育者養成校を取り巻く現状と本学における課題」仁愛女子短期大学幼児教育学科編『福井県内保育者対象アンケート調査研究報告書』2018年、2-12頁を参照のこと。
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長（雇児保発0401第1号）「保育士等キャリアアップ研修の実施について」2017年4月、<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/tuuti.pdf>。
- 3) 橋本鉦市「専門職養成と高等教育：量と質をめぐる政策課題」『社会福祉研究』115、2012年、65-68頁。
- 4) ソニー生命保険株式会社「中高生が思い描く将来についての意識調査2019」2019年8月、https://www.sonylife.co.jp/company/news/2019/files/190806_newsletter.pdf。
- 5) たとえば、第一生命保険株式会社「大人になったらなりたいもの」(2019年3月、https://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2018_068.pdf)では、2018年の調査結果として、「小学校高学年」(中学生は調査対象外)において「保育園・幼稚園の先生」は2位(8.2%)に位置している。ちなみに2017年調査の結果も同様に2位(7.7%)であった。
- 6) なお、今回取り上げる先行研究の多くは、養成校在籍学生に対して高校時代はどうだったか、と問うものであるが、これは、高校生を対象として質問紙等を配布し調査することが難しいためと思われる。この点はあらかじめ注意が必要である。
- 7) 長谷部比呂美「進学志望動機に関する検討ー保育・幼児教育専攻学生を中心として」『淑徳短期大学研究紀要』第47号、2008年、135-149頁。
- 8) 三木知子・桜井茂男「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」(『教育心理学研究』第46巻第2号、1998年、203-211頁)において、「保育者効力感」が「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義されて以降、多くの論文でこの用語が援用されている。
- 9) 加藤麻里恵「保育者養成大学在学生における進学動機、就職希望および保育者効力感」『保育士養成研究』27、2009年、29-36頁。
- 10) 池田幸代「保育者養成校における学生の進学理由と保育者志望との関連における、実習前の保育ボランティア経験の意味」『東京立正短期大学紀要』43・44、2016年、259-267頁。なお、養成校での「学習理由」を調査する研究も数多く存在しているが、たとえば田中秀明のように「学習理由」としながらも、実際は「進学動機」に近いことを尋ねている場合も散見される。ちなみに田中は、「保育者養成校に進学する学生は、とすると入学する時点で『保育者になる』という職業決定をし、それになることを義務付けられているような感もする」が、実際には「青年期特有の傾向が並存していることも見逃してはならない」といい、具体的には、「職業志向」「向上志向」「アイデンティティ志向」「モラトリウム志向」「エンジョイ志向」など様々な因子を抽出している(保育系専門学校在籍441名対象)。そのなかでも「職業志向」は、「自己の能力を向上させたいという向上志向や、保育者の資格を取得したいという学歴(資格)志向との間に正の関係が示された」という。これに対して「モラトリウム志向の高い学生」は、「学校にも不適応となっている傾向が強く」「保育職に関する効力感」が「低い」とも記している(田中秀明「保育者養成校における学生の学

- 習理由と保育者志向性および学校適応感ならびに保育職に関する効力感との関係』『共栄学園短期大学研究紀要』18、2002年、167-177頁。
- 11) 岩田昌子「保育者養成短大における学生の進路選択行動についての教育心理学的考察」『鈴鹿短期大学紀要』30、2010年、28-29頁。
- 12) 長谷川誠『大学全入時代における進路意識と進路形成：なぜ四年制大学に進学しないのか』ミネルヴァ書房、2016年、181頁。
- 13) 同上、216頁。
- 14) なお、神谷によると「自成的動機」とはいえ、養成校での在籍期間が増えることで徐々に保育者効力感に影響を与えなくなるらしく、すべての実習が終わった2年次の秋や卒業を控えた時期には、ほとんどその影響は見られなくなってしまいうらしい（神谷哲司「保育系短大生による進学理由による保育者効力感の縦断的变化」『保育学研究』第48巻第2号、2010年、192-201頁）。
- 15) 大村壮「短期大学保育系学生の志望動機と資質について：入学直後の調査」『常葉学園短期大学紀要』42、2011年、121-130頁。
- 16) 他方で、保育系短大生89名を対象とする調査で、そのうち4割もの学生が「保育者を志した時期」として「幼児」「小学生」の時期と回答しているにもかかわらず、「早い時期に保育者を志した学生」だからといって「保育者の仕事に対するイメージ」が豊かであるとは限らない、と指摘する論稿も存在する（永盛善博「保育者養成課程学生が感じる保育のギャップ」『東北文科大学・東北文科大学短期大学部教育研究』第7号、2017年、11-23頁）。これについて永盛は、幼い頃に保育者の姿を見てあこがれを抱き、「自分の将来の姿はこれである」と思い込んでしまうと、「職業の具体的な内容について知るために動いたり、自分に適性があるかを検討したり」といったことに疎くなるのではないかと解釈している。
- 17) たとえば佐藤達全は、短大の特徴として以下のようにまとめている。「短大生の基礎的な学力や学習意欲は低下している」「高校生の四年制大学志向が強まり、しかも少子化の中で大学全入といわれる状況が出現し、四年制大学の合格率が上昇した」「一部の学生を除き、短大志望者は四年制大学志望者の下位に位置する」「女性の職業選択の幅が大きく広がって、以前のように看護や保育といった分野以外にも進出するようになった。その結果、保育者をめざす高校生が減少しただけでなくレベルが相対的に低下した」「推薦制度による入学生が大半を占めるようになった。そのため、高校時代に勉強に打ち込む生徒が減少している」（佐藤達全「短期大学における保育士養成について—基礎学力と学習意欲を中心に—」『育英短期大学研究紀要』第27号、2010年、45-58頁）。
- 18) 広瀬由紀「高校生が抱く保育士のイメージと職業選択の基準」『植草学園大学研究紀要』第5巻、2013年、95-101頁。
- 19) 中田奈月「保育士・幼稚園教員は専門職か」小堀哲郎編『社会のなかの子どもと保育者』創成社、2011年、179-180頁。
- 20) 永盛善博「保育者志望の高校生における保育職の理解状況」『東北文科大学・東北文科大学短期大学部紀要』第3号、2013年、53-64頁。
- 21) 永盛善博「保育職志望の高校生における書き物に対する認識」『東北文科大学・東北文科大学短期大学部紀要』第8号、2018年、23-35頁。
- 22) ベネッセ教育情報サイト「保育士ってどんな職業？どうすればなれる？」2015年2月、<https://benesse.jp/juken/201502/20150219-3.html>。
- 23) 生涯学習のユークキャン「保育士の仕事内容とは？仕事時間はどれくらい？」2016年9月、<https://www.u-can.co.jp/%E4%BF%9D%E8%82%B2%E5%A3%AB/column/column01.html>。もちろん「書き物業務」に触れるサイトも存在している。「保育計画書や配布物の作成、連絡帳の記入などの業務も行います。保育士の役割はお世話をしながら、子どもの心身の発達を促し、社会性や基本的な生活習慣を身につけさせることです。そのために保育をどうしていくか考えることも保育士の仕事です」(dジョブスマホワーク「保育士のお仕事内容とは？1日の流れとやりがい、大変なところ」2018年10月、https://sw.job.dmkt-sp.jp/topics/work_hoikushi_ichinichi_180811.html)。
- 24) 久保田健一郎・濱中啓二郎・吉田直哉ほか「保育学における理論＝実践問題としての保育者の専門性—日本保育学会第72回大会における自主シンポジウムの記録：問題提起—」『国際研究論叢』33(1)、2019年、104頁。
- 25) 永盛善博(2018)、前掲論文、32頁。なお、筆者自身もかつて「保育というのは、あんまりお勉強とか学問とかっていうのを表に出しちゃうと、高校生が集まりにくいんだなという感覚が確かにあり」、「保育学の魅力を、『本当はこうなんですよ』『本質はこうなんですよ』と言え言えほど、養成校に学生が集まらなくなる」のは「おかしい」と発言したことがある（濱中啓二郎・久保田健一郎・吉田直哉ほか「保育学における理論＝実践問題としての保育者の専門性の追求—日本保育学会第72回大会における自主シンポジウム後半の記録：問題の討議と深化—」『新渡戸文化短期大学学術雑誌』第10号、2020年、27頁）。
- 26) ところで、文献調査を進めるなかで、偶然にも香港の看護業界におけるイメージの希薄さを取り上げる論文が存在したので、ここでその要旨を紹介しておきたい。「看護のイメージが貧弱であり、香港の10代の若者の間ではキャリアとしての看護は望ましいものではないことが示唆された。その理由として、コミュニティ内における報酬と地位が優位にないこと、また看護師が何をするのかについての知識が不足していることなどが挙げられる。この調査から考えるべきなのは、イメージの如何によって、その職業を志望する多数の候補者獲得の可能性が奪われてしまうということである。専門職集団自体が、一般大衆に向けて容易に理解できるような現実味を帯びた肯定的イメージを宣伝し、マーケティングする方法を見つける必要があるといえる」(Foong,A., Rossitor,J.C. & Chan,P.T. (1999) . Socio-cultural perspectives on the image of nursing: The Hong Kong dimension. Journal of Advance Nursing. 29(3), 542-548.)。
- 27) 高校における「ふれあい体験」については、金田利子「乳幼児と中高生の『ふれあい体験学習』の大きな意義と実践」(白梅学園大学『研究年報』第15号、2010年、100-104頁)、岡野雅子ほか「家庭科の幼児とのふれ合い体験と保育施設での職場体験学習の効果の比較」(『日本家庭科教育学会誌』第54巻第1号、2011年、31-39頁)などを参照。あるいは、増田翼「保育職を選択するということ」(石川昭義・小原敏郎編『保育者のためのキャリア形成論』建帛社、2015年)を参照のこと。
- 28) 高見令英・水野智美・山本哲也ほか「幼稚園における高校生による職場体験実習についてⅠ」『日本保育学会大会研究論文集』52、1999年、794-795頁。山本哲也・水野智美・高見令英ほか「幼稚園における高校生による職場体験実習

- についてⅡ」『日本保育学会大会研究論文集』52、1999年、796-797頁。
- 29) 山本睦「保育職におけるキャリア教育の課題：中学生の職場体験は保育職の進路選択に有効なのか」『常葉大学保育学部紀要』3、2016年、41-55頁。
- 30) 永盛善博(2018)、前掲論文、32頁。
- 31) 宮城利佳子「保育士養成校における学生の進学のきっかけー高校卒業後、すぐに保育専門学校に進学しなかった学生のインタビュー調査からー」沖縄大学地域研究所『地域研究』No.24、2019年、79-97頁。
- 32) 吉田真理「県内高等学校との高大連携による『保育者養成導入講座』の開発と実施：小田原女子短期大学」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル』(3)、2012年、11-14頁。
- 33) 酒井勇治・仲手川裕史・中澤純一「子ども教育コースにおける高大連携の期待と展望」『浜松学院大学教職センター紀要』2、2013年、131-139頁。三沢大樹・鈴木麻里・佐々木茂「音楽教育に関する高大連携の取り組み」北海道教育大学函館学校教育学会『学校教育学会誌』18、2013年、77-86頁。二階堂邦子・保田裕子・小池徳子ほか「大学・附属高等学校・附属幼稚園との保育学習連携の試み」『日本女子体育大学紀要』44、2014年、111-119頁。
- 34) 仁愛女子短期大学も2019年度より「保育現場体験ツアー」という名称で附属幼稚園での一日職場体験企画を実施している。同様の取り組みは自治体単位でも実施されており、群馬県委託事業「幼児教育・保育の魅力体験ツアー」や福島県子育て支援課主催「福島県中・高校生の夏休み保育現場体験」などがある。
- 35) 藤井薫・関田良「保育者養成カリキュラムの現状と課題(1) 高大接続の観点から」『頌栄短期大学研究紀要』40、2015年、31-39頁。
- 36) 頌栄短期大学は、「推薦入試においても、夏季休暇期間中に実施している音楽個人レッスンを受講した場合、入試当日の音楽実技試験を免除する仕組みも取り入れ」ている。このように、志望段階から保育の学びを先取りしてもらい、その部分を入学者選抜時に評価するといった新たな方策の検討も重要になってきている(関田良・藤井薫「保育者養成カリキュラムの現状と課題(2) 高等学校との履修科目の接続性から」『頌栄短期大学研究紀要』42、2018年、27-40頁)。
- 37) 上原明子・倉戸直実・山本真由美「保母志望者に関する高校教諭の意識」『日本保育学会大会研究論文集』47、1994年、602-603頁。
- 38) 内田千春「今、幼児教育の担い手に求められるものー転換期に考える保育者の専門性と養成教育ー」『日本教師教育学会年報』第25号、2016年、48-55頁。無藤隆「保育者養成課程をどう構成するか」『保育教諭養成課程研究』第4号、2018年、41-49頁。清水益治「保育者養成者のおかれている現状と課題ー実践者と共に創る保育者養成ー」『保育学研究』第57巻第1号、2019年、140-149頁。

【付 記】

本稿は、文部科学省2018年度私立大学研究ブランディング事業「保育者育成のためのキャリア・ルーブリックの開発ーシームレスな高校・短大・保育現場の繋がりを目指してー」(取組責任者：増田翼)の成果の一部である。